



科学者心得帳

池内 了

みすず書房 四六判 2,940 円 (税込み) 200 頁

読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

表題のとおり、この本は科学者をめざしている若者や若い科学者を念頭に、「科学者のあるべき姿」について書かれたものである。文章は平易で読みやすいが、内容は重く、決して軽く読みとばせるような読み物ではない。科学研究を行ううえでの日常的な問題だけでなく、簡単に解答が見いだせないような難しい問題まで、科学者にまつわるさまざまな倫理的問題を提示し、それに直面して考え続けることの大切さを繰り返し説いている。

本書はまた、「科学研究の内実を知りたいと知っている」一般の読者も想定して書かれている。そのため、冒頭の一、二章では、科学的見方・考え方の要諦を簡潔に紹介し、科学研究がどのような手続きで行われているか、またその成果はどのように公開され、評価されるのかについて説明されている。実際、専門家としての科学者集団の特殊性と彼らがおかれた社会的構造についてある程度の知識がないと、科学者の倫理や責任について議論することは難しい。科学と社会との関係を重視し、「社会とともに生きる科学者」として常に市民との対話を意識している著者の論脈に合致した導入部である。

中心となる三章から五章では、本書のメインテーマである科学者の三つの責任—倫理責任、説明責任、そして社会的責任について、さまざまな事例を挙げながら問題提起がなされる。著者の先輩科学者としての指摘やアドバイスが展開されるとともに、すぐに解決できないような問題に対しては安易な解答を急がない、科学者として常に誠実であろうとする姿勢がうかがえる。

科学者の倫理問題を扱った書籍は他にいくつか

存在するが、この本で特筆すべきは、科学者としての責任をより広くとらえ、一步踏み込んでその社会的な責任について言及している点にある。著者は、科学には二つの二面性があるとして、「科学そのものは価値中立でも、使いようによって人間の益にも害にもなる」という側面と、地球環境問題といった複雑系の科学に関連する問題において、「ある面からみればシロだが、別の面ではクロとなる」側面があることを提示している。そして、「科学の二面性を一番よく知っているのは科学者」であるとして、これらの問題に対して「科学者でなければならない」役割を果たすことが「社会的責任を果たす第一歩」であるとする。第二次世界大戦中、6,000 人も科学者を動員して原爆開発がなされたアメリカのマンハッタン計画と、この計画に参加していたジェームス・フランクラによる、日本への原爆投下に反対した「フランク報告」を引き合いにだしたうえで、さらに一步進めて、科学者は科学的知見をもってほんのわずかな危険でも察知して警告を発する「社会のカナリア」になるべきであるとする。

科学者は科学的真実に忠実であるだけでなく、その効用と限界を認識し、自己のもちうる限りの知見と洞察力をもって評価し、社会に対する説明責任を果たすべきという主張は、宇宙物理学者として第一線で活躍してきた著者の言葉であるからこそ、説得力に満ちている。科学者のみならず、人文・社会系の研究者や、科学に興味をもつすべての人たちと、議論の土台としたい一冊である。

加藤直子 (総合研究大学院大学)